



# 学校だより

2月号

令和4年1月31日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



## 「ノンバーバル」

学校長 後藤 直樹

寒さが一段と厳しさを増す中、感染症の拡大は私たちの収束への願いとは反対の方向に突き進んでいるのが残念です。本校は高台に立地しているが故の「風通しの良さ」を活かしながら、少しでも子どもたちに平常に近い教育活動ができるよう努力してまいります。

ところで、このコロナ禍でのマスク生活も2年となり、子どもたちも慣れてはきているように見えます。少し硬い話になりますが、人は言葉を介して意思の疎通をしています。しかし、その中で純粋に言葉のみで伝えている情報量は全体の2割程度と言われます。では、残りの8割は？という、非言語（ノンバーバル）が占めています。それは話すときの表情であったり、口調であったり仕草であったりという部分のことです。コミュニケーションは相手がどんな気持ちで何を伝えようとしているのか、それら非言語の情報を的確にやり取りすることで成立しているということになります。特に日本人は文化として、このノンバーバルの部分を大切にしているような気がします。

さて、ここで問題なのが、マスクで顔の下半分が見えないという現在の状況です。特に口元は相手の表情を感じ取るために大切な部分なので、先生と子どもたち、そして子どもたち同士の関係を築いていく上で、マスクは大きな妨げとなっているに違いありません。「口ほどにものを言う」とされる目からの情報をよりしっかりと受け止めることが大切となります。「話をするとき、話を聞くときは今まで以上に相手の目をしっかり見ましょう。」と、声をかけています。しかし、限られた非言語情報の中だからこそ、逆に感度を高めて意識的に相手の考え方や気持ちを察しようとする感度が鍛えられる可能性もあります。それは「相手に配慮した行動」や「思いやり」にもつながるかもしれません。

全てが非言語を介しての関係という部分では、犬・猫などのペットや、昆虫・魚などの小動物の飼育も似ています。人間のコミュニケーションと一緒ににはできませんが、相手のことを知ろうと観察する点では近いものがあります。飼育委員の子どもたちはウサギの世話の中で、決められた掃除や餌やりをマニュアル通りにやるだけでなく、「体調はどうか？」「新鮮な草が食べたいのかな？」などの思いをもちながら活動しています。昨年、ウサギが体調を崩した際は真っ先に気付いたのもそんな子どもたちでした。

私達教職員も研ぎ澄ました感度で、コロナ禍の子どもたちを丁寧に見守っていきたいと思います。

